

## 幼稚園における楽器活動の歴史的変遷と現在の問題点

### 乙部はるひ

帝京科学大学 こども学部こども学科

#### History of Instrumental Activities and Problem in Kindergarten

Haruhi OTOBE

Key words : 幼稚園 楽器活動 歴史 表現 幼児  
Kindergarten Instrumental Activity History Expression Children

This text aims to trace the history of music education in the kindergarten concerning the instruments and to consider the background of present problem in instrumental activity at kindergarten. In Japan the kindergarten was founded in the Meiji period, when the pianofortes and the organs were placed for accompanying the songs. The instrumental activity at kindergarten began after the World War II, so its history is very short. A course of education which was established in the year 1956 suggested that the kindergarten should aim at the same level of education as the elementary school, and the teachers have forced children to play the instruments correctly and well. We were affected by the thought of early education and the developed instrumental activities at elementary school, so until the present time we rarely studied the originality of children's expressions. In the year 1988, a course of education suggested that we have to think much of children's identity and expressions, but we haven't had the way to draw the expressions from children. The study suggests that it is important to study practical how draw children's expressions and pleasure from the instrumental activity at the kindergarten.

### I 研究の背景と目的

平成元年に行われた幼稚園教育要領の改訂では、それまでの6領域「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作」が5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」となり、幼児の主体性を重んじ、保育者は指導するのではなく援助する側に回らなくてはならないこと、また指導は遊びを通して行われるようにすること、という考え方が明示された。領域「音楽リズム」は「表現」となり、留意事項として「生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること」という文章が付け加えられた。その背景には、それまで行われてきた生活発表会などで指導効果を見せることを最終目標とした、技術指導が中心の音楽教育の反省があった。しかし、幼児に高度な技術を要求する代わりに、幼児自身の主体性を重んじ、表現する喜びや楽しさを味わわせるにはどのような指導を行ったらよいのか、幼稚園教育要領にはその具体的な内容や方法が示されなかったため、保育現場では戸惑いが広がった。幼稚園教育要領は、その後平成10年と20年に改訂されているが特に大きな変化は見られず、平成元年の改訂から22年が経った現在も、保育者はどのようにして幼児の表現を引き出したらよいのか手探り状態にある<sup>1)</sup>。なかでも教えるもの、という認識が強い楽器はその傾向が強く、練習効果がすぐに表

れ、見た目に評価されやすい、鼓笛隊などのいわゆる保育者が教える音楽を幼稚園の特徴として行っている園と、反対に楽器活動がほとんど行われなくなってしまった園、また少数ではあるが豊かな表現を育むことを模索している園があり、保育現場は混沌とした状態から抜け出していない<sup>2)</sup>。

どのような歴史的経緯を経てこのような状態が生まれたのか、現在までの幼稚園における楽器を中心とした音楽教育の歴史的変遷を辿りたい。今川(2009)は、幼児の音楽的経験領域において、歌唱に関する研究が豊富であるのに対し器楽活動に関する研究が少ないことを指摘し、この分野における今後の研究の重要性について言及している<sup>3)</sup>。また、細田(1996)は「明治以後の器楽教育の歴史に関する先行研究はほとんど見当たらない。明治以後の幼児音楽教育に関する先行研究は多いが、その視点が唱歌教育に限られているためである。」と述べている<sup>4)</sup>。器楽教育に関する先行研究には、細田の「保育における器楽教育の導入」があるが、これは、「子どもが心から楽しんで表現することのできる楽器とはどんなものであるか」を研究する前段階としてまとめられたものである。また、芝の「明治時代の幼稚園における楽器及びその活動」、「大正・昭和の幼稚園における楽器およびその活動」は、保育における楽器論—楽器の意味—を述べる際にまとめられた

ものである<sup>5)</sup>。このように、先行研究には現在の幼稚園における楽器活動に関する問題点の歴史的背景を探ったものはほとんど見当たらない。

本研究では、はじめて幼稚園が設立された明治時代から、幼稚園における楽器活動の歴史の変遷を辿り、現在の保育現場における問題提起を行うことを目的とする。

## II 幼稚園における器楽教育の変遷

本章をまとめるに当たって、昭和23年までの部分は主に「日本幼児保育史1～6巻」(日本保育学会)を中心に、文部省の「学制百年史」と「学制百二十年史」等を参考にしてまとめた。楽器に関する部分は、前書の各時代の音楽について書かれた箇所から抜き出し、参考文献を用いてまとめたものである。なお、昭和24年以降の部分に関しては、参考文献を手掛かりに筆者がまとめた。

また、時代区分は法令が出された時期に幼稚園における音楽も変容していることに着目し、以下のような区分を採用した。1) 明治5年「学制」制定から明治31年まで 2) 明治32年「幼稚園保育及設置規程」制定から大正14年まで 3) 大正15年「幼稚園令」制定から昭和22年まで 4) 昭和23年「保育要領」制定から昭和30年まで 5) 昭和31年「幼稚園教育要領」制定から昭和38年まで 6) 昭和39年「幼稚園教育要領」改訂から昭和64年まで 7) 平成元年「幼稚園教育要領」改訂から現在まで。なお、「幼稚園教育要領」は平成10年と20年にも改訂されているが、音楽に関しては大きな変化は見られなかったもので、一区分にまとめた。

本稿は、楽器を中心とした幼稚園の音楽教育の歴史研究であるが、論旨を進める上で必要な場合のみ、それ以外の領域にも言及している。

### 1) 明治5年「学制」制定から明治31年まで

明治9年に、現在もお茶の水女子大学附属幼稚園として存続する東京女子師範学校附属幼稚園が官立幼稚園として開設され、それによって日本の幼児教育の基礎が築かれた。明治32年に「幼稚園保育及設備規程」が文部省令として公布され、教育内容を規定するようになるまでの間は、この東京女子師範学校附属幼稚園の園則が、全国の幼稚園の在り方を規定するのに役立っていた。明治12年には、日本最初の幼稚園に関する教育法令が小学校令の中に示され、幼稚園は学校と区別して扱い、公立私立の別なく文部卿の監督内にあることが定められた。幼稚園の数

は急増し、明治13年には5園であったのが明治19年には約40園、明治30年には200園を超えた。明治29年にはフレーベル会が設立され、また各地に保育会が結成されて、幼稚園が着実に発展した。

この時代、幼稚園ではどのような音楽教育が行われていたのだろうか。現在存在する幼稚園の中で、最も設立が早かった東京女子師範学校附属幼稚園はフレーベル主義<sup>注1)</sup>に基づく教育を行っていた。開園当初に備えられた楽器は、和琴(六絃琴)、笏拍子(平たい2枚の板を打ち合わせ拍子をとる)、調子笛(和琴の調律用の7種の音を出す小さい竹を合わせた笛)、ピアノであった。明治10年に制定された同幼稚園規則の保育時間表によると、音楽に関するものとして、「唱歌」と「遊戯」が行われている。「唱歌」の説明には、「楽器ヲ以テ之ヲ和シ」と記されており、「唱歌」にのみ楽器が用いられ、「遊戯」には使用されなかったようである。唱歌の伴奏には、ピアノが使われており、和琴は合いの手を入れるような感じにかき鳴らされ、笏拍子は拍子を取るために使われていた。しかし、歌唱活動に楽器が使われたのは参観の時に限られ、いつもは母の歌声と手拍子で歌われていたようである。当時ピアノを弾いたのは主席母のクララだけであった。明治10～13年には、松野クララをはじめとする母<sup>注2)</sup>3人によって、日本初の官撰唱歌集「保育唱歌」が作られている。これは、フレーベル式幼稚園教育書を参考につくられた、雅楽古来の謡い物と西洋唱歌の融合を計った和洋折衷の唱歌であった。

4時間の保育時間のうち、はじめは「遊戯」が毎日行われるのに対して「唱歌」は木曜日に30分しか行われていなかったが、14年には毎日行われるようになり、この頃からヴァイオリンも加わったようである。明治26年に中村五六が書いた「幼稚園摘葉」の楽器に関する部分には、「軽便で効用の広い点でバイオリンが一番すぐれている。音が澄み、遊戯の挙動をととのえることのできるのピアノであるが、高価なため容易に求めにくいのが難である。一般によく使われている風琴もよく、わが国在来の箏も役に立つ。」とある。ヴァイオリンは軽く、持ったまま移動でき、また幼児の様子を見ながら弾くことが出来る点で評価されたのだと思われる。しかし、その調弦の難しさ、弦が切れるなどのメンテナンスの手間等についての知識が十分無かったことが、普及しなかった理由として考えられる。

明治12年には、新時代に合う音楽教育の制度を確立するために文部省音楽取調掛が設置され、音楽

取調掛である伊沢修二とメイソンが、日本の洋楽普及に尽力した。伊沢修二がアメリカ留学中に師事した音楽家メイソンは、13年の来日時にバイエル教則本と共にピアノを10台日本に送っている。またメイソンの指導により、音楽取調掛が日本初のオルガンを作った。

明治20年には、文部省音楽取調掛により「幼稚園唱歌集」が編集された。その緒言には、「幼稚園ニハ、箏、胡弓、若クハ洋琴、風琴、ノ如キ楽器ヲ備ヘテ、幼稚ノ唱歌ニ協奏スルヲ要ス是ノ楽器ニヨリテ、唱和ノ勢力ヲ増シ、深ク幼心ヲ感動セシムルノ力アルヲ以テナリ。」と書かれている。これを見ると、箏、胡弓、洋琴（ピアノ）、風琴（オルガン）などの楽器はもっぱら伴奏のために使われ、楽器自体を独立させた音楽活動は行われていなかったようである。

楽器は常に保母の手によって演奏され、幼児が使うことはなかったのであろうか。

芝は（1972）、東京女子高等師範学校附属幼稚園に関する資料の中の、園児が多く用いた遊具が列記してある箇所には太鼓があり、太鼓が「遊具」の中に分類されていることを指摘している<sup>6)</sup>。幼児たちは、太鼓を演奏するのに使うのではなく、遊具として日常的にただ叩いて遊んだようである。太鼓は江戸時代から幼児に人気の玩具であった。また、明治10年に作られたラッパの玩具は、明治27年の日清戦争、37年の日露戦争時に、兵士の士気を鼓舞する目的で編成された軍楽隊がクローズアップされると大流行する。幼児たちの間では、軍楽隊を模倣した遊びが行われたようである。明治時代に流行ったこのような楽隊ごっこは、大正時代に引き継がれ、昭和へと続いていく。

拍子木や真鍮の鐘が幼稚園の授業の初めと終わりの合図に使われていたという証言もあることから、この時代、打楽器が道具として使われていたことも興味深い。

## 2) 明治32年「幼稚園保育及設置規程」制定から 大正14年まで

私立幼稚園（キリスト教主義幼稚園を含む）の普及は目覚ましく、明治42年にその数で官公立幼稚園を抜いている。大正15年には官立2園、公立243園に対し、私立幼稚園は420園を超えた。

従来、東京女子師範学校附属幼稚園の園則が全国の幼稚園の在り方を規定するのに役立っていたが、明治32年にはじめて「幼稚園保育及設備規程」が

文部省から独立法令として公布され、保育内容について新たな観点から規定した。ここでは、幼稚園は満3歳から小学校に就学するまでの幼児を保育するところであることが明確にされ、1日の保育時数、幼児数、建物、保育室の大きさや設備などが規定された。保育項目には「遊戯」、「唱歌」、「談話」、「手技」の4項目が定められ、設備品には楽器が挙げられている。ここで幼稚園に唱歌の伴奏用のピアノやオルガンを備えることを、文部省が規定するまでになった。このように今日どこの園にもピアノが備え付けられている状況は、その発端を明治時代に見ることが出来る。邦楽器が徐々に消え去る一方、キリスト教の幼稚園で歌われた讃美歌が洋楽普及の一端を担い、明治40年代になると、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンが上流家庭を中心にかなり普及した。

大正時代に入ると、輸入された新教育思想により、幼児期の子どもの成長に必要とされる自由な保育が提唱され、幼稚園は小学校以上の教育とは異なる方向を目指した。明治時代のフレーベルの恩物による形式的な教育方法が幼児に不自然なものであるとして減り、自由遊びや戸外保育が増えた。また、新しいモンテッソーリ・メソッドの<sup>註3)</sup>研究なども行われた。

大正時代には、音楽にも幼児を中心とした考え方が影響し、鈴木三重吉主宰により「赤い鳥」などの童謡雑誌が出され、童謡運動が起こった。唱歌の歌詞は幼児に親しみのあるやさしい言葉が使われるようになり、旋律は歌詞の意味内容とその展開を一致させ、言葉のアクセントや抑揚を大切にしたものとなった。「唱歌」の伴奏にはもっぱらオルガンやピアノが使われており、高価なピアノの代用品として、国産のリードオルガンが普及していった。愛媛大学教育学部附属幼稚園では園外保育にも小使いさんがオルガンを車についで野原に行ったという記録が残っている。細田（1996）は、「戸外であっても唱歌に伴奏楽器は必須であるという考えが行き渡っていたためであろうと思われる。」と述べている<sup>7)</sup>。「唱歌」は徐々に「遊戯」にも使われるようになり、曲に合わせて身体を動かしながら歌うようになっていった。

大正時代はリズムに関心が高まった時期でもある。「唱歌」と並んでどこの幼稚園でも行われていた「遊戯」は、自由遊びの「随意遊戯」と楽器を使用する「共同遊戯」の2つに分かれていた。「共同遊戯」ではリズムや歌に合わせて身体の運動が行われ、楽器は太鼓やトライアングル、タンブリンが使

われていた。保母の叩く楽器やオルガンのマーチなどに合わせながら、団体で行進したり遊戯をすることが多かった。

「楽隊」という、「遊戯」から独立し、打楽器を曲に合わせて子どもがリズム打ちする活動も生まれた。使われた楽器は、タンブリン、トライアングル、カスタネットなどであった。このように、大正時代に楽器が幼児の手に渡ったということは、注目に値することであろう。これらの西洋打楽器は、日本では製造されていなかったため、宣教師を通して広がったと考えられる<sup>8)</sup>。

一方、これらの西洋打楽器は、拍子木や太鼓に代わる合図の道具としても用いられた。「開始の合図はトライアングルというのか三角形をした金属の棒で、先生が部屋のガラス戸を開けて真中に出てはチンチンと鳴らした。」（輪王寺附属日光幼稚園に通った川久保義夫の話）にもあるように、幼児を部屋に入れたり外で遊ばせたりと保育の時間を区切るために、小使いがつり鐘や振鈴を鳴らしていた幼稚園が多かったようである。

この時期の幼稚園の備品としては、明治時代に登場したヴァイオリンが影をひそめ、蓄音器、オルガン、ピアノ、クラリネットが見られる。蓄音器の普及で保育にレコードが使われるようになり、聴くという経験ができるようになった。クラリネットは、曲馬団サーカス、活動写真、チンドン屋に欠かせない、明治初期に庶民の生活に入り込んだ楽器であるが、幼稚園ではどのように使われていたのか資料にはない。

### 3) 大正 15 年「幼稚園令」制定から昭和 22 年まで

幼稚園数の増加にともない、幼稚園に関する法令が小学校に関する法令に寄与してはおかしい、と幼稚園に関する勅令制定に対する強い要望が出てきた。幼稚園に教育的・社会的に確固たる地位を与えその振興を図るために、大正 15 年、日本で初めて幼稚園に関する独立した勅令「幼稚園令」が公布された。「幼稚園令」は、幼稚園の家庭教育の補完としての機能を重視していた。従来の保育内容の 4 項目に「観察」を加え「遊戯・唱歌・観察・談話・手技等」とし、「等」という文言を加えている。このことにより、保育内容に自由さが増し、小学校とは違った幼稚園独自の特色が強められた。設備に関する「保育用具」の中には、「楽器」が定められ、保母の試験検定の科目・音楽には、「唱歌」と「楽器使用法」が定められている。

「幼稚園令」が制定されると、幼稚園ではどのような音楽教育が行われるようになったのだろうか。「幼稚園令」に示された「遊戯・唱歌・観察・談話・手技」5 保育項目のうちの「遊戯」は、「自由遊戯」（自由遊び）といわゆる「遊戯」に分けられる。更にこの「遊戯」は、リズムや歌に合わせて身体の運動をする「律動遊戯」と、童謡や幼児向けの歌詞に動作をふりつけた「表情遊戯」に分けられ、「表情遊戯」をする際はタンブリンなどの楽器が使われた。小林宗作がリトミックを紹介したり、土川五郎や戸倉ハル等により遊戯の新しい方法が生み出され、この時代には、太鼓、タンブリン、カスタネット、トライアングルなどがより盛んに使われるようになった。

「唱歌」では、月や季節によって何が歌われたらよいかなど、歌詞の内容に関する研究が行われた。歌の伴奏のために、保育室にはオルガン、遊戯室にはピアノが設置されていたが、これらは高価だったため幼児に対して触れることを禁止している園が多かった。

昭和 2 年には、日本で初めてフレーベル館により楽隊用のリズム練習用の楽器、大太鼓、小太鼓、ラッパ、トライアングル、笛が保育用品として製造販売されるようになる。昭和 9 年には、これにタンブリンが加わった。室内道具を教具・遊具・玩具に分けて調査を試みた国の調査「本邦保育施設に関する調査」（昭和 16 年）によると、教具である蓄音器は公立 100%、私立 62.6% が保有しており、蓄音器の普及により、ほとんどの園が遊戯や唱歌に蓄音器を利用するようになった。オルガンは公立 100%、私立 84.3%、ピアノは公立 72.1%、私立 72.2% の園が保有していた。これに対し、打楽器は「楽隊ごっこ」という項目で玩具の中に入れられており、その保有率は公立 9.8%、私立 9.3% と、ピアノ等に比べて低かった。

昭和 15 年には平沢恭子が「子供のオーケストラ」という指導書を出した。これは、歌や曲に太鼓・タンブリン・トライアングル・竹・鈴・シンバル・シロホンが編成されており、楽器別に子どもが並び、指揮者を見ながら演奏する形態をとっていた。

昭和に入り、国家主義が盛んになるにつれ幼稚園にもその影響が及び、昭和十年代に入ると保育の目的は、立派な兵士や戦争に協力できる人を作ることになった。昭和の初めには 1,000 あまりであった幼稚園数は、昭和 12 年には 2,000 を越えた。しかし、昭和 18 年～20 年の間、第 2 次世界大戦の影響で幼稚園数は激減し、昭和 20 年に東京都区部では幼稚

園が全く無くなった。

第2次世界大戦中の幼稚園では、打楽器合奏も行われたようであるが、保育内容は戦争を意識したものとなり、笈田光吉が提唱した絶対音感、和音感、調子感を養成する音感教育が流行した。聴音教育は、絶対音感を身につけることによって飛行機の音を聞き分けることを目的とし、和音感訓練は、敵機の来襲を早く知り友軍機の音と聞き分けることを目的とした。これまでのドレミに代わってハニホの日本音名による音名指導が「音あてごっこ」のようなかたちで行われた。飛行機の爆音を聞き分けるため和音笛が使用されたり、リズムで警報時の避難訓練を行い、敏速性を養う園もあった。

「唱歌」でも戦争の影響が濃く、讃美歌をはじめとする敵国の歌が禁止され、軍国調の歌が歌われ、勇ましい軍艦マーチなどが取り入れられた。「遊戯」はほとんどが歌の入った「律動遊戯」であったが、その歌は「僕は軍人」など戦争に関するものが上位を占めた。また遊戯の内容も、演習ごっこ、音感遊戯など、男児を中心に戦争に関するものが多かった。

#### 4) 昭和23年「保育要領」制定から昭和30年まで

戦後、昭和22年に新たに「学校教育法」が制定された。この中ではじめて幼稚園は学校としての位置づけを確立し、幼稚園は一部の富裕層のための教育機関ではなく、すべての国民に開かれた教育機関として位置づけられた。保母という名前も廃止され、幼稚園教諭となる。「学校教育法」の第7章幼稚園第78条には、「音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創作的表現に対する興味を養うこと。」と記され、個性の尊重、自由保育<sup>注4)</sup>といった新しい保育理想が主張されるようになった。文部省は「戦争に関する歌、拍子をとること、戦争に関する軍国調な遊戯」を禁止し、保育内容には新しく歌に合わせて行う感覚的な遊戯、フォークダンス、表現遊び、英語の歌が入ってきた。以前は鐘で幼児を部屋に入れるなど鐘の合図ですべてを区切っていたが、これを中止した幼稚園もあった。

同年、「教育基本法」も公布され、幼稚園教育もこれを基本とし、新しい民主的な教育を指向するようになった。昭和23年には、倉橋惣三がCIE（民間情報教育局）の担当者ヘレン・ヘッファーナン女史とともに作成編纂の指導役を務めた「保育要領」が刊行された。「保育要領」は、新時代の保育内容の基準を示すものであり、施設設備の再建のための手引きでもあった。またこの「保育要領」は強制的

なものではなく、保育所の保母、一般の母親に対しても幼児教育の指導参考書的な性格を持つよう編纂されたことが特徴的である。

長い間行われてきた「幼稚園令」の保育5項目の代わりに、「幼児の保育内容―楽しい経験―」として12項目、すなわち「1.見学 2.リズム 3.休息 4.自由遊び 5.音楽 6.お話 7.絵画 8.製作 9.自然観察 10.ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居 11.健康保育 12.年中行事」が挙げられた。今までは、幼児の発達に役立つと考えられるものが挙げられていたのに対し、ここでは幼児の生活を広く保育の対象として取り上げ、まえがきには「教師はそうした幼児の活動を誘い促し助け、その生長発達に適した環境をつくることに努めなければならない。」と書かれ、教育目標の出発点を幼児の現実生活であるとしている。「幼児の一日の生活」の項では、「一日を特定の作業や活動の時間に細かく分けて、日課を決めることは望ましくない。一日を自由に過ごして、思うままに楽しく活動できることが望ましい」と書かれている。

戦争により幼稚園はかなり減少したが、その後困難な状況の中から、どのような音楽教育が行われていったのであろうか。これまでは歌うことが重視されてきたが、「保育要領」では、鑑賞すること、楽器を演奏することが同等に加わり、歌唱・器楽・鑑賞の3本の柱が立てられた。楽器に関しては、「4.幼児の生活環境 室内設備品 3.遊具 楽器」の項に「ピアノまたはオルガン・蓄音器・ラジオ・太鼓はできるだけ備えたい。タンバリン<sup>注5)</sup>・打楽器は園児と共同製作をすることもできる。楽隊遊びは幼児のリズムに合わせて動きたいという基本的な要求を満足させ、鳴り物やおもちゃを音楽的に整理し、かつ協同の精神を養うことになる。」とある。「タンバリン・打楽器は園児と共同製作をすることもできる。」という個所は、戦争の直後で物が無い時代であったことが反映されていると思われる。

「保育要領」の内容を見ると、幼児の即興的な歌を重んじたり、幼児に曲を選ばせ楽器を自由に演奏させること、自分たちの考えによって振付を創作させることなどを推奨しており、幼児の独創性を重視していることが分かる。このことは楽器演奏にも表れており、楽器には「太鼓・小太鼓・シムバル・トライアングル（三角鉄）・笛・和音笛・カスタネット・シロホン・鈴」を挙げ、「自由に楽器を選ばせ、幼児たちに考えさせて自由に演奏させ、決して教師の命令によって演奏させてはならない」としている。

幼児の独創性を重んじ、教師が幼児に指導するのではなく、幼児に楽器を自由に選ばせ自由に演奏させるという考え方をしている。また、楽器の種類にまで記述が及んでいることは、注目に値するだろう。

昭和 27 年に「幼稚園基準」が示され、そこで幼稚園の施設、設備、編制の基準が通達された。内容を見ると、楽器に関しては、ピアノ、オルガン、そして楽隊用の打楽器が「簡易楽器」という表現で記載されている。この呼び名は、「本格的な楽器でも演奏しやすいもの」として上田友亀が生み出したものである。彼は昭和 9 年に京橋区立京橋昭和小学校において「簡易楽器による音楽生活指導」という大小太鼓・木琴・ミハルスを使った研究発表を行い、そこではじめてこの名称を用いている。

## 5) 昭和 31 年「幼稚園教育要領」制定から昭和 38 年まで

戦後、昭和 20 年代後半から 30 年代にかけて、好景気や核家族化、また幼児教育に対する認識の向上、ベビーブームの影響を受け、入園児の増加が顕著になり、幼稚園が激増した。昭和 27 年以降 32 年頃まで、毎年 400 ～ 900 園が新設され、昭和 27 年に 2,874 園だった幼稚園数は、昭和 37 年には 7,520 園となり、就園率は 33% となった。

昭和 23 年に刊行された「保育要領」が強制的なものではなく「幼児教育の手引き」という副題がつけられた指導書のような性格のものであったことから、「保育要領」は保育の一般的指針にはなったが、学校教育機関にふさわしい教育内容ではない、目標と内容のつながりが明瞭でない等の批判が起り、昭和 31 年には、「幼稚園教育要領」が制定されることとなった。そして今までの保育内容の 12 項目に代わって、6 領域「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作」が示される。冒頭のまえがきにある改定の要点には、「1. 幼稚園の保育内容について、小学校との一貫性を持たせるようにした。」と記され、保育要領の「楽しい幼児の経験」は、「望ましい経験」に代わった。「保育要領」が幼児の興味や独創性を重んじていたのに対し、「幼稚園教育要領」はかなり指導的になっており、指導結果を求めた内容になっているように見受けられる。

それでは、「幼稚園教育要領」において音楽はどのように記されているのだろうか。幼稚園教育要領では、これまでの「リズム」と「音楽」が統一され、「音楽リズム」となった。「望ましい経験」として挙げられている「1. 歌を歌う」「2. 歌曲を聞く」「3.

楽器をひく」「4. 動きのリズムで表現する」は、一般的に音楽を構成する内容に直結する分類で明確であるが、それだけに教科的になりやすい側面を多分に含んでいた<sup>9)</sup>。

同 31 年には「幼稚園設置基準」が制定された。第 10 条 4 では、「ピアノ又はオルガン、簡易楽器、蓄音器及びレコード」を備えなければならないとしている。「幼稚園のつくり方と設置基準の解説」を見ると、「ア ピアノ・オルガン」では「ピアノは 88 鍵のもの、オルガンは 61 鍵のものが適切であり、遊戯室用ピアノ 1、各保育室にはピアノまたはオルガン（なるべくピアノ）を備えるようにする。その他幼児が自由にひくことのできる、ピアノまたはオルガンを設けることができればさらによい。」と記されている。また、「イ 簡易楽器」では、「幼児が喜んで歌を歌ったり、聞いたり、楽器をひいたり、歌や行進に合わせて創作的にリズム楽器で合奏したりするために、大太鼓、小太鼓、タンブリン、シンバル、トライアングル、鈴、カスタネット、拍子木、木琴、かつこう笛、木魚などを備える。」と記されている。記述は楽器の数の決め方にまで及んでおり、「カスタネットなどは幼児にリズム打ち、拍子打ちなど、基礎打ちを把握させるのに最もよい楽器であり、動きのリズムをするときにも、興味をもって活用でき、しかも小型で保管が容易であるので、なるべく個人用として身近におき、必要に応じてすぐ使用できるようにするとよい。」と述べられている。タンブリン、鈴もよく利用するので相当数揃える必要があると述べ、学級数別園具教具標準表には、楽器の種類と人数割の数が示されている。既成の楽器だけでなく、教師や幼児の創意くふうによる擬音楽器や、簡易楽器を加えるようにと書かれている点が興味深い。また、楽器戸棚の写真が載せられ、保管方法まで紹介されているなど、楽器が大変大切にされていたことが分かる。また、ピアノの近くにごみが出るものを置かないことや、側で大積み木を積んで遊ばないように、との注意書きがある。

筆者が文部科学省に問い合わせたところ、この「幼稚園設置基準」は長きに渡り用いられてきたが、平成 7 年 4 月からは幼稚園の基準は大まかに示されるようになり、細部は各幼稚園の裁量に任されることになったということである。また、幼稚園教育要領では「リズム楽器」、幼稚園設置基準では「簡易楽器」という言葉が使われているが、それぞれ内容や概念は明確にされていない。

昭和 30 年代になると、楽器が保育現場で広く使

用されるようになり、ハーモニカ、タンブリン、すず、トライアングル、小太鼓、大太鼓、カスタネットを使った器楽合奏の記録の多さを、細田（1996）が指摘している<sup>10)</sup>。ハーモニカ等、当時幼稚園で使われていた楽器には小学校の音楽の授業の影響が考えられるため、小学校における楽器について少し触れておきたい。

戦後の音楽教育に器楽活動が取り入れられ、小学校では戦前からあるハーモニカ（明治24年に輸入ハーモニカが売り出されたという記録がある。）やたて笛（リコーダーという名前が使われたのは、学習指導要領にこの名前が明記された平成元年から）が取り入れられてきた。昭和23年には、文部省が日本で初めての小学校向けの器楽の教師用教科書「合奏の本」を作成する。ここでは、低学年は歌唱教材にリズム楽器を使った編曲が中心、中学年になるとハーモニカやアコーディオンなどの旋律楽器が出てくる。そのまえがきには、「幾種類かの、任務を異にした楽器が協力して、一つにまとまる楽しさは、小さいながらも協同社会の反映」（文部省1948、P.61）と書かれており、このような考え方は戦後の器楽教育推進の原動力の一つになり、鼓笛隊や全校合奏の隆盛に繋がっていったと言われている<sup>11)</sup>。昭和30年にはプラスチック製のたて笛が製造され、昭和33年に開催された第3回アジア競技大会のセレモニーでの鼓笛隊の成功が、笛を中心とした指導を促進した。楽器の隆盛は、楽器産業界の企画との関連性も見逃せないと言われている<sup>12)</sup>。また現在のように鍵盤ハーモニカが小学校で盛んに使われるようになった背景には、昭和62年の学習指導要領改訂で、正確な音が出しにくいハーモニカに代わって、演奏が簡単な上に音程が正確で和音演奏ができる鍵盤ハーモニカが推奨されたことが挙げられる。現在、鍵盤ハーモニカを使用している幼稚園が多い背景には、このような小学校での鍵盤ハーモニカの使用が影響していると考えられる。

昭和31年にはテレビ放送がスタートし、幼児番組が放送されるにともない、現場にも新しい歌が入ってきた。また、昭和35年には、オルフの創案した楽器を中心とした音楽教育法、昭和47年には、自国の音楽から出発する意義をとらえたハンガリーのコダーイのわらべうたによる音楽教育法が入ってきたが、それらは一時の流行に終わり一部でしか定着しなかった。

## 6) 昭和39年「幼稚園教育要領」改訂から昭和64年まで

幼稚園・保育所は、施設数、児童数ともに、昭和35年～45年代に急増期を迎えた。昭和35年に7,207園だった幼稚園数は、昭和45年には10,796園となり、就園率も53.7%と半数を超えた。

昭和39年に「幼稚園教育要領」が改訂された。昭和31年の「幼稚園教育要領」の保育内容が小学校と一貫性を持たせたものであったため、保育現場では「領域」を小学校の教科のように取り扱っていたところが少なくなく、大人が与える教育が行われがちであった。そのため、昭和39年に改訂された「幼稚園教育要領」には、「第2章 内容」の冒頭に小学校における各教科と性質が異なるものであることを明記し、幼児の負担が過重にならないよう幼児の発達を考慮した教育内容の重要性を明確にしている。また、各内容に「幼児の年齢や発達の程度に応じて」と指導上の留意すべき点が付け加えられた。しかし、保育現場ではこの点の理解が十分になされず、相変わらず技術を教えることに偏りがちであり、結果を求める教育を行っていた。

この点に関しては、音楽も同様であった。昭和31年の「幼稚園教育要領」が制定されると保育現場では「お遊戯会」「発表会」で発表することに重点が置かれ、小学校の音楽の授業で使われるハーモニカ等の楽器が用いられる傾向があった。そのため昭和39年に改訂された新しい「幼稚園教育要領」では、昭和31年の「幼稚園教育要領」の内容「1. 歌唱 2. 音楽鑑賞 3. 器楽演奏 4. 身体表現」の、歌唱と器楽をひとつにまとめ、新しく「4. 感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。」という創作表現的な内容を加え、「1. 歌唱・器楽演奏 2. 身体表現 3. 音楽鑑賞 4. 創作表現」とした。また、今までの「1. 歌を歌う」「3. 楽器をひく」は「1. のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。」に、また「2. 歌曲を聞く」は「3. 音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ。」に、「動きのリズムで表現する」は「2. のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう。」と改められた。

しかし、「幼児の年齢や発達の程度に応じて」「のびのび」というこの改定の主旨を重んじることなく、幼稚園では留意点に挙げられている「しだいに音楽についての基礎的な技能や感覚を養うようにすること。」という文言が目的とされがちであった。すなわち、発声、音程などに注意して歌わせることや、



基礎的な弾き方の指導を加え、分担奏をさせることに関心がいきがちであった。昭和31年の「幼稚園教育要領」にある「友だちが出る演奏会や音楽会を楽しんで聞く。」という文章が削除された意図は反映されず、技術の向上、全員のレベルを揃えること、完成度を高めることに向かっていった。ちょうど高度成長期にあたり、幼児教育熱が高まっていたという背景もある。

## 7) 平成元年「幼稚園教育要領」改訂から現在まで

日本は高度成長期を経て、だんだん女性の就労、共働き、核家族化、都市化により、地域コミュニティの崩壊や少子化が問題になってきた。幼稚園は公立園の減少を中心に、施設数、児童数ともに、昭和60年の15,220園をピークに減少し始め、平成20年には10.5%減の13,626園となった。(園児が在籍していない公立264園・私立197園を含む。)

平成元年に、「幼稚園教育要領」の2度目の改革が行われる。大きな改革点は、30年以上にわたって使われた6領域が5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」に改められたことであった。これは、幼児の生活全体を通して総合的な指導を行う、という基本的な考え方は維持しながら、幼稚園教育は幼児の主体的生活を中心に展開されるものであること、幼稚園教育は環境の教育であることを基本とし、「領域」を今までのように表面的な活動による6領域で捉えるのではなく、幼児の発達の諸側面から捉えようとしたものであり、この改革が保育現場に与えた影響は大きい。

それでは、「幼稚園教育要領」の改訂が目指す音楽の内容の変化とは、どのようなものだったのだろうか。新しい「幼稚園教育要領」では、今までの「音楽リズム」「絵画製作」が「表現」という文言で表され、「豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにすること」を目的とした。「音楽リズム」「絵画製作」が「表現」にひとくくりになされた背景には、大人が要求し、指導し、与えていく、技術指導が中心の教育の反省があったと思われる。今までの「音楽リズム」には、「曲の速度や強弱」「音程やリズム」といった技能的な要素が達成課題として挙げられていた。これらを達成するために、幼稚園では小学校の授業のような指導中心の活動が行われ、その成果を評価しがちであった。生活発表会などで指導効果を見せることが最終目標となり、幼児にとって負担と思われるような高度なものが要求され、幼児の表現を画一化して

しまう傾向にあった。そこでは、幼児が楽器を奏でる喜びを感じとっているかどうかは、ほとんど考慮されなかったものと思われる。この改定には、このような今までの保育形態を変えようとする意図があり、「生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること。」という留意事項が盛り込まれた。幼児の内側から生み出される表現、創造性、また幼児の心情や意欲を大切に、保育者はそれを受け止め、援助する側に回ることが求められた。楽器に関しては、「簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。」とのみ記されている。しかし、この「幼稚園教育要領」には、どのようにして幼児の表現を引き出したらよいのか、その明確な方法が示されなかったことにより、保育現場では戸惑いが広がった。

「幼稚園教育要領」は、このあと平成10年、20年と2回改定されているが、特に大きな変化は見られず、どの幼稚園教育要領にも、どのようにして幼児の表現を引き出したらよいのか、その明確な方法は示されていない。

## Ⅲ 結果と考察

日本に幼稚園が創設された明治以降の楽器を中心とした音楽教育の歴史を概観することにより、保育現場における楽器活動の歴史は浅いことが明らかになった。歌の伴奏用としてピアノやオルガンが幼稚園に備えられたのは明治時代であるが、楽器活動が盛んになったのは戦後のことである。昭和31年に制定された「幼稚園教育要領」が、小学校と一貫性を持たせた、指導成果を求める内容であったことに加え、幼稚園での楽器活動には、小学校での器楽教育の発展の影響や、早期教育の流行が関係し、レベルの高いものが要求されてきたことが示唆された。その結果、幼稚園では既成の曲を楽譜通りに再現させ、見映えや結果を求める、技術指導中心の教育が長い期間に渡って行われ、幼児の表現を引き出すための研究がほとんど行われて来なかったことが明らかになった。平成元年に幼稚園教育要領が改訂され、幼児の主体性を重んじるという考え方が明示されたが、表現する喜びや楽しさを大切にするにはどのようにしたらよいのか、保育現場には戸惑いが広がり、現在のように、幼稚園にどのように楽器を生かしたらよいのか明確な方向が見いだせない状況を生み出したことは必然的な結果であったといえるだろう。

今後は、幼児の表現を引き出すために、保育現場でどのように楽器を生かしたらよいのか、実践的な研



究が行われる必要があると考える。

## 引用文献

- 1) 裴珉卿：子ども集団が共同しつつ創造する音楽表現. 音楽教育実践ジャーナル, 日本音楽教育学会, 6 (1) : 40, 2008.  
志村洋子：保育者養成の中で「音楽教育」に何が必要か. 幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて, 日本保育学会大会研究論文集 : 56.s22, 2003.
- 2) 野波健彦：領域「表現」基本と改訂内容について, 文部科学省教育課程課・幼児教育課編集, 初等教育資料 2008 年 10 月号, 東洋館出版社, 2008, pp.79.  
大場牧夫：鼓笛バンドへの疑問, 表現原論, 萌文書林, 1996, pp.54-55.
- 3) 今川恭子：10 年間の研究動向—乳幼児と音楽教育, 日本音楽教育学会編, 音楽教育学の未来, 音楽之友社, 2009, pp.124-125.
- 4) 細田淳子：保育における器楽教育の導入. 東京家政大学研究紀要, 36 (1) : 113, 1996.
- 5) 芝恭子：明治時代の幼稚園における楽器およびその活動. 東洋英和女学院短期大学研究紀要, 11 : 26, 1972.  
芝恭子：大正・昭和の幼稚園における楽器およびその活動. 東洋英和女学院短期大学研究紀要, 13 : 42, 1974.
- 6) 芝恭子：明治時代の幼稚園における楽器およびその活動. 東洋英和女学院短期大学研究紀要, 11 : 26, 1972.
- 7) 前掲書 4) pp.115.
- 8) 芝恭子：大正・昭和の幼稚園における楽器およびその活動. 東洋英和女学院短期大学研究紀要, 13 : 42, 1974.
- 9) 大山美和子：音楽的・身体的表現, 表現, 川島書店, 1999, pp.41.
- 10) 前掲書 4) pp.117.
- 11) 嶋田由美：戦後の器楽教育の変遷—昭和の「笛」と「鍵盤ハーモニカ」の扱いを中心として. 音楽教育実践ジャーナル, 日本音楽教育学会, 7 (2) : 16-17, 2010.
- 12) 前掲書 11) pp.24-25.

## 参考文献

門松良子：幼稚園における指導の実際に関して. 幼稚園教育要領「表現（音楽的側面）」の具体化の問

題点, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s2, 2003.

菅真佐子：幼稚園教育要領から保育者はどのような保育を考えるか. 幼稚園教育要領「表現（音楽的側面）」の具体化の問題点, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s2-s3, 2003.

志村洋子：幼稚園教育要領の「表現（音楽的側面）」の解釈をめぐって. 幼稚園教育要領「表現（音楽的側面）」の具体化の問題点, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s3, 2003.

笠井かほる：ピアノ指導からみた保育者養成の問題点. 幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s22-s23, 2003.

菅真佐子：表現活動において保育者が育てようとしているものは何か. 幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s23, 2003.

碓井幸子：保育現場と保育者養成の音楽教育の在り方. 幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s23, 2003.

今川恭子：表現を読みとり育てる音楽的な視点—保育の観察に基づく「音・音楽とのかかわりの地図」. 幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて, 日本保育学会大会研究論文集, 56 : s23, 2003.

日本保育学会：日本幼児保育史, 第 1 巻～第 6 巻, 日本図書センター, 2010.

文部省：学制百年史, 帝国地方行政学会（株）, 1981.

文部省：学制百二十年史, ぎょうせい, 1992.

全国幼稚園施設協議会：幼稚園のつくり方と設置基準の解説, フレーベル館, 1966.

浜野政雄：音楽教育の歴史, 子どもと音楽 1 巻, 同朋社, 1987.

長谷川晶子：領域 表現について, 保育内容 表現, 北大路書房, 2009.

入江礼子：領域 表現, 保育内容 表現, 建帛社, 2007.

泉千勢：保育所保育の内容, 保育原理, 社会福祉法人全国社会福祉協議会, 2005.

大学音楽教育研究グループ：小学校課程のための教科教育法 音楽編, 教育芸術社, 2000.

全国保育団体連絡会・保育研究所：幼稚園の現状・制度の仕組みと課題, 保育白書, ひとなる書房, 2009.

大和淳二：52 年度改訂小学校教育課程講座 音楽一, ぎょうせい, 1977.

村山貞雄監修：幼児保育学辞典, 明治図書, 1980.

文部省：保育要領, 昭和 23 年.

文部省：幼稚園教育要領, 昭和 31 年.

文部省：幼稚園教育要領, 昭和 39 年.

文部省：幼稚園教育要領，平成元年．

文部省：幼稚園教育要領解説，平成元年．フレーベル社．

文部科学省：幼稚園教育要領，平成 10 年．

文部科学省：幼稚園教育要領解説，平成 11 年．フレーベル社．

文部科学省：幼稚園教育要領，平成 20 年．

文部科学省：幼稚園教育要領解説，平成 20 年．フレーベル社．

文部科学省：学校基本調査 幼稚園の園数・在園者数・教職員数，2011 年 8 月 4 日公表．

## 注

- 1) フレーベルの思想や原理にしたがう教育。とくに子どもを尊重し、重視した子ども中心の保育と教育。せまい意味のフレーベル主義は、恩物だけを重視して、恩物を教材として幼児に教えこむ。幼児の遊びや活動は、すべて自己の本質の現れであり、教育は幼児の発達に応じて、自己活動・労作・社会・個性の諸原理によって児

童中心に行うべきことを主張。

- 2) 1999 年の男女雇用機会均等法の改正に伴い、児童福祉法施行令が改正され、「保母」から「保育士」に改称された。
- 3) モンテッソーリによって開発され方向づけられた教具類で、子どもの興味に対して誘引性を持ち、教師は使用法について若干の示唆をあたえるに止め、子どもたちに自由に主体的に取り組まそうとするものである。この結果、観察力、注意集中力や自発性、自律性などの養成が行われるものと考えられている。
- 4) 幼児の自由や自発性を尊重して行う保育理念。幼児がみずから選んで行う経験や活動を発展させる保育方法。
- 5) タンバリンは「タンブリン」、「タンバリン」という二通りの呼称があり、保育要領では「タンバリン」を、幼稚園教育要領では「タンブリン」を使用している。筆者は本論文の中で「タンブリン」を使用した。